

# 明日香をさぐる

## 「遺物が語る古代の食生活」

西橋遺跡出土の遺物から古代飛鳥びとの食生活をのぞいてみましょう。

西橋遺跡は、橘寺の西側から現在の役場新庁舎あたりまで広がる遺跡です。西橋遺跡はこれまでたびたび発掘調査が行われてきました。この遺跡では実にたくさんのお宝が出土し、これらの遺物は飛鳥時代後半頃の標識資料として評価することができます。

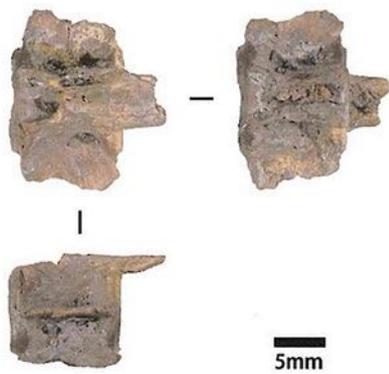
今回は、西橋遺跡で出土した動物遺存体と木簡から飛鳥時代の食生活について紹介します。

動物遺存体とは、遺跡から出土した動物の骨や歯、角、爪、貝殻や鳥類の羽など動物に由来する遺物の総称です。西橋遺跡で出土した動物遺存体には、アカニシやカツオなどの魚介類の骨、キジ科や

カモ科の鳥類の骨、ウマ、ウシ、ニホンジカやイノシシといった哺乳類の骨や角があります。ウマやニホンジカ、イノシシの骨には刃物の跡が残されていて、解体して食用としたり、毛皮などに使用されていたのかもしれませんが。

これらの動物遺存体の中で注目すべきは、カツオの尾椎です。奈良時代の平城宮・京では堅魚の荷札木簡が数多く出土していて、「煮堅魚」や「荒堅魚」、「堅魚煎汁」などの保存の効く堅魚製品が主に駿河・伊豆から貢進されていたことがわかっていきます。煮堅魚や荒堅魚がカツオの切り身を加工したもの、堅魚煎汁がカツオの煮汁を

煮詰めたものと考えられるならば、これらにはカツオの背骨が含まれることはありません。よって、西橋遺跡でカツオ尾椎が出土したという事は、こうした堅魚製品とは異なるカツオが搬入された想定ができます。藤原宮跡では「生堅魚」と記された荷札木簡が出土していて、生のカツオが貢進されたと考えられています。カツオは腐りやすい魚として知られていますが、7世紀後半には内陸の明日香村にも骨付のカツオが運ばれていたことが明らかとなりました。



▲出土したカツオの尾椎

また、西橋遺跡では水産物や獣肉類が記された木簡も出土しました。木簡には「伊委之」（イワシ）、

「斯自弥」（シジミ）、「猪宍」（イノシシ）、「加宍」（カノシシ）のほか、「須波移利」（スワヤリ）楚割」といった魚の加工品も記されていました。

ほかに、「慈石二両白羊鮮二両橘皮二両□草二両鹿腎一具」と記した十八種の薬用品や野菜の水菜や海藻の「伊支須」（イギス）テングサの一種）を記した木簡も出土しています。



▲西橋遺跡で出土した木簡

遺跡を発掘すると、グルメな飛鳥びとの食生活を垣間見ることができます。

（明日香村教育委員会文化財課）